ISSN-1883-1931

大学共同利用機関法人　人間文化研究機構国文学研究資料館

国文研ニュース

No.40
SUMMER 2015

『二曲三体人形図』

目　次

メッセージ

画像データベースへの期待……浅野　秀剛　1

研究ノート

室町の信仰と物語草子－骸骨の物語絵をめぐって－……恋田　知子　2

生き物供養と橋供養－随心院蔵『慶長五年多摩六郷橋供養願文』と関連して－……相田　満　4

多摩地域の資料保存利用機関との連携に向けて……太田　尚宏　6

トピックス

度重なる災害を乗り越えて－被災地釜石市の市庁舎燃焼文書のレスキュー－……青木　睦　8

連続講座「くずし字で読む『百人一首』」……田中　大士　9

特別展示「韓国古版画博物館名品展」……入口　敦志　10

平成27年度国文学研究資料館「古典の日」講演会……11

第39回国際日本文学研究集会……12

『幕藩政アーカイブズの総合的研究』の刊行……大友　一雄　13

総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況……13

画像データベースへの期待

浅野　秀剛（大和文華館館長，国文学研究資料館運営委員）

例外はあるにしても、一九七〇年代までは、草双紙の文と絵は別々に研究されていた。黄表紙を例にとると、文（本文と呼ぶことが多かった）は近世文学の研究者によって分析されていたが、彼らの多くは、絵（挿絵と呼ばれることが多かった）をその対象にしなかった。絵は、浮世絵の研究者か、好事家と呼ばれた在野の研究者が細々と扱っていた。今では考えられないことであるが、それが実態であった。文学の研究者にその理由を聞いたとき、美術史の研究者と違い、絵を分析する訓練を受けていないのが大きいと言われた。

逆もまた然りで、美術史の研究者は文章を読み、それを分析する訓練を受けていないのが普通である。私自身、未だに近世の長い小説を読むのは苦手である。活字本でもそうであるから、翻刻されていない生の小説など、できればあまり読みたくない。ましてや、関係するものをすべて読んで比較分析するなど、頭が痛くなること必定である。文学史の人にそのことを話すと、彼らはそれが好きで研究しているのであり、そういう訓練も受けているので、程度の差はあれ苦痛ではないのだという。餅は餅屋とはよく言ったものである。

ここに図示したのは、『浮世絵大成』3（1931）に掲載されている「清水寺花見図」（部分図）と題された西川祐信の掛軸である。清水寺の舞台から、被衣姿の女性が下を行く裃姿の男性を見ている図様である。これが単なる花見の図であるのか、長い間引っかかっていたが、昨年、杉村治兵衛筆の「清水堂前」が『薄雪物語』の冒頭場面を描いたものであることを認識し、その関連で、祐信の作も「薄雪」関連のものとしていいと思うようになった。

調べてみると、近年、松原秀江氏、鈴木博子氏らによって、仮名草子の『薄雪物語』や土佐浄瑠璃『薄雪』の研究が進んでいることを知った。二人は版本の挿絵にも興味を示し、同時代の歌舞伎の情況も視野に入れて研究しているので、今では当然かなと思いながらも大変勉強になった。詳細は省かせていただくしかないが、仮名草子、浄瑠璃、歌舞伎に、奥村政信・鳥居清倍の浮世絵版画を加えて検討すると、祐信の掛軸には、仮名草子『薄雪物語』に基づいて制作された土佐浄瑠璃『薄雪』第三段が投影されていることを確信するようになった。仮名草子では園部の衛門が薄雪を見初めるが、土佐浄瑠璃ではそれが逆転し、薄雪が清水の舞台の上から園部を見つけ一目ぼれをする設定であるからである。祐信がそのことを強く意識していたかどうかまでは分からないが、くだんの掛軸が単なる花見の図といえないのは明らかである。

作品の分析に際し、文学でも美術でも、理想的には、文学、美術、演劇に加えて歴史地理的情報なども視野に入れて複合的に考察することが望ましい。それが至難であるのは十分理解しているが、それに近づくためには、歴史的資料の画像データベースの充実が欠かせない。このところ「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」が注目されているが、国文学研究資料館は、そもそも国文学の資料を網羅的に収集し、研究者を含む世界の人々に広く公開・提供することを主たる目的に設置された機関であると私は理解している。そうであれば、「日本語の歴史的典籍」というように対象は拡大したものの、するべきことは同じであり、中心は資料の画像データベース化を協力に推し進め、収集したものを速やかに整理公開することであろう。開設して40余年になる資料館の資料収集が、公立・私立の機関の所有する資料の収集・公開に一定の成果を挙げたことは、その余慶に与ってきた私が実感している。しかし一方で、国会図書館や都立中央図書館、そして今回のネットワーク構築計画で拠点大学となった機関の資料収集や連携はまだまだ不十分である。ましてや外国の機関の所有する資料の収集はこれからといっていい。

理想は、歴史的典籍だけでなく、古文書などの史料や、掛軸・絵馬・粉本・版画・彫刻などの造形資料などを含むあらゆる歴史的資料のデータベースが充実し、一体化して利用に供されることである。その第一歩が古典籍の画像データベース化であり、テキスト化や研究は、それを着実に前進させていく前提で成されるものであろう。

西川祐信「清水寺花見図」（部分）『浮世絵大成』3
（1931 年、東方書院）より複写

室町の信仰と物語草子－骸骨の物語絵をめぐって－

恋田　知子（国文学研究資料館助教）

骸骨や髑髏は、Tシャツや指輪、アニメのキャラクターなど、現代の図像モチーフとして人気を博す。遡って江戸時代の浮世絵などを見渡しても、歌川国芳の「相馬の古内裏」や伝円山応挙「波上白骨座禅図」といった写実的な骸骨画が盛んに描かれており、時代を超えて人々を魅了してやまないモチーフであった。死や無常、あるいは悪の象徴などとされる一方、生者と同様に動き回り、コミカルでユーモラスな印象を与える骸骨画も少なくない。

そんな滑稽味溢れる骸骨を描いた先駆けともいえるのがお伽草子『幻中草打画』である[*1]。仏堂でまどろむ行脚の僧が墓から現れた骸骨と語り合う夢を見て、それを絵に描き世の無常を衆生に説いたとする前半と、行脚の比丘尼と山中の老比丘尼が仏教問答をおこなう後半の、大きく二つの内容からなる。時代が下ると、本作品の前半、後半それぞれをもとに改作され、一休宗純（1394-1481）仮託の『一休骸骨』『一休水鏡』として刊行された。『一休骸骨』では禅の教えよりもコミカルな骸骨の姿を強調する。擬人化された骸骨は人々に親しまれたようで、一休人気も相俟って、江戸時代を通して何度も出版され、絵巻にも仕立てられた。

近世以降に描かれた多くの滑稽な骸骨画には『一休骸骨』の影響も見てとれるが、それに先行する物語草子が『幻中草打画』なのである。

1．諸本概観―鶴満寺本と新出絵巻

現在確認される『幻中草打画』の伝本は以下の四本である。

①鶴満寺蔵『幻中草打画』絵巻一軸（冊子改装）。康暦2年（1380）本奥書。〔室町後期〕写。

②国立歴史民俗博物館蔵『骸骨』一冊。〔江戸極初期〕写。

③陽明文庫蔵『幻中草抄』一冊。慶長11年（1606）写。抄出本。

④『幻中草打画』絵巻一軸。〔室町後期〕写。伝上杉淡路守入道玄澄筆。『衆星堂古書目録』（2015年）掲載。

かつて岡見正雄氏により翻刻紹介された①[*2]は、長年所在不明であったが、大阪市鶴満寺の所蔵を確認した。康暦2年の奥書は本奥書で室町後期の転写と目される。岡見氏の指摘にもあるように、後崇光院貞成親王筆の『看聞日記』紙背、応永27年（1420）の「諸物語目録」に「幻中草打画」の名が明記されており、少なくとも室町前期には成立し、貴族の間でも享受されていたと考えられる。

②歴博本は「骸骨」の外題を付すが、当該作品の伝本である。鶴満寺本に比べ平仮名が多く、絵も稚拙な印象を受けるが、構図は近似しており、大小の異同はあるものの、虫損の多い鶴満寺本を補うことができる。なかでも注目すべき異同が、行脚の比丘尼と老比丘尼とおぼしき二人の骸骨が山庵で問答する様を描く点である。鶴満寺本にはなく、本文も不明瞭であったが、後半の仏教問答する二人の比丘尼も骸骨なのであり、本作品が一貫して骸骨の物語であることを示す。

③陽明本は本作品が貴族圏に伝来していたことを示唆しており、重要である。近衛家伝来の古典籍を収蔵する陽明文庫には「道書類」と一括される慶長・元和頃の写本群があり、諸宗の仮名法語とともに『恋塚物語』などの物語草子が伝存する。江戸初期の貴族圏で法語や物語草子が仏教初学書として享受されていたことをうかがわせる貴重な事例である。陽明本は絵を付さないが、「此絵御覧ずべし」など骸骨画の絵解きを示す本文があることから、絵入りの原本より本文のみを抄出し、末尾に新たな道歌を付すなど、法語としての側面を強調した伝本と位置づけられる。

さらに今春、京都の古書店衆星堂の目録に④の絵巻が掲載され、新たな伝本が加わった。新出絵巻は彩色を施すなど、上記の三本と異なる点もあり、相違箇所の検証や制作の経緯など詳細な考察が待たれる。

2．骸骨画の趣向

僧がまどろむ荒廃した仏堂の先に墓から現れたとおぼしき骸骨と僧が語り合う様子が描かれ、背後には陽気な骸骨たちの酒宴が展開する。鼓や笛を奏でる骸骨や酒を酌み交わす骸骨を描く鶴満寺本に対し（図1）、新出絵巻では扇を片手に舞い踊る骸骨を描き込むなど（図2）、同じ場面でも細かな相違を見せる。続いて男女の抱擁から男の死と野辺送り、女の剃髪・出家を経て、仏教問答に至るまで、すべて骸骨の姿で描かれ、骸骨の一生を物語るのである。

図１　鶴満寺本の酒宴場面

図2　『幻中草打画』新出絵巻の酒宴場面
（『衆星堂古書目録』より部分引用）

人間は皮を破れば皆同じ骸骨であり、骸骨と人間、死と生とは区別されるものではないという「生死一如」観を説いている。禅語に由来する「幻中草打」は夢の中の骸骨の姿から現世の「空」なることを悟る意であり、後半の仏教問答からも禅の教えを説いた法語絵巻ととらえられる。

人間の死の図像表現としては、朽ちゆく死体の様を九段階にわたって描く「九相図」が想起されよう。『幻中草打画』所収の道歌には『九相詩絵巻』の和歌と共通するものもあり、影響関係をうかがわせる。だが、変化する死体に不浄や無常を感じる「九相図」に対し、生死を一如ととらえ、人間の生そのものをいわば戯画化する本作品は、同じ人間の死を描いた宗教画であっても、その主眼も手法も大きく異なるのである。むしろ本作品は「ものいう髑髏」の系譜に位置づけ、考察するべきであろう。

3.「ものいう髑髏」の図像化

『荘子』外篇「至楽」の髑髏問答や昔話の枯骨報恩譚、小町の「あなめ」説話など、「ものいう髑髏」の文芸は日本に限らず、アジアやヨーロッパ諸国にも広く伝承される普遍的なモチーフである*3。本作品の淵源にも勿論そうした「ものいう髑髏」の伝承が想定されるが、重要なのはそれが絵によって示されているという点である。

骸骨の図様は、六道絵や地獄絵など鎌倉時代から数多く認められるが、「九相図」における骨相図でも明らかなように、いずれも屍として、いわば「ものいわぬ骸骨」として描かれていた。生者さながら、歌い踊る骸骨の図像は、『幻中草打画』の骸骨画が日本においてはもっとも早い例と思われる。

4. 骸骨の物語絵制作の背景

では、なぜ室町という時代に骸骨の物語絵が求められたのか。制作の背景には、異類物のお伽草子の隆盛がある。人間と同じく恋をし、歌を詠み、戦に赴き、出家する異類の活躍を描く物語絵は、室町の学芸や信仰、風俗などを反映し、数多の作品が制作された。本作品の酒宴や剃髪・出家、野辺送りの図様も、『付喪神記』における妖物の酒宴や出家、『是害房』や『百鬼夜行絵巻』の「風流の行列」を想起させるものがあり、異類物の図像表現との共通性をうかがわせる。

加えて、本作品には出家を志した骸骨が禅宗出家者の堕落ぶりへの批判を聞き、真に頼るべき師を求めて行脚するという場面があるが、そこには天狗や烏になぞらえ、当代禅宗を批判する『七天狗絵』や『鴉鷺物語』との類似が見てとれる。「魔仏一如」を説く『七天狗絵』や「黒白和合」を説く『鴉鷺物語』と同様、「生死一如」を説いた『幻中草打画』は、室町期の異類物の一群にも位置づけられよう。

寺院で受け継がれた『付喪神記』や『七天狗絵』、『是害房』などの異類物は公家の日記類にも散見し、室町期の貴族も大きな関心を寄せていたことがわかる。『幻中草打画』のような作品が、後崇光院の周辺に伝来したのも法語の受容*4としてだけでなく、「ものいう骸骨」を描いた物語絵に対する興味もあったのだろう。

難解な禅の思想をわかりやすく説くために異類物の手法が用いられたのであり、本作品は室町の信仰と物語絵制作を背景に成立した作品と考えられる。絵と結びついたことで骸骨に新たなイメージが加わった。滑稽味溢れる骸骨の源泉はここにある。

5. 東アジアの骸骨画の影響

さらに、「ものいう骸骨」の図像化の契機として、大陸の骸骨画の影響も想定される。骸骨図については、しばしばヨーロッパ中世の「死の舞踏」との類同性が指摘されてきた。メメント・モリ（死を想え）の警句とともに、宗教絵画として展開する「死の舞踏」との類似は、骸骨画の持つ普遍性を考える上では確かに有効である。だが一方で、骸骨や髑髏のモチーフは、中国古代の文学や絵画においても人間の儚さや幻影のシンボルとして表現されてきた歴史がある。

南宋の宮廷画家李嵩（りすう）の落款を有する「骷髏幻戯図（ころうげんぎず）」（故宮博物院蔵）には、旅姿の骸骨の傀儡（くぐつ）師が骸骨人形を操る様子が描かれており、死と遊戯の関わりを思わせ、中国版「死の舞踏」とも称される。板倉聖哲氏は、13世紀の東アジア絵画の広がりとして六道絵や九相図とともに本図を捉える必要性を説いている*5。禅は中国文化の多大な影響下にあり、その思想を説く本作品の性質を重視するならば、東アジアの骸骨画による影響も考慮するべきであろう。今後もさらに考察を重ねたい。

＊1 本作品については、拙稿「説法・法談のヲコ絵―『幻中草打画』の諸本」（『仏と女の室町』笠間書院、2008年）で考察したが、鶴満寺本の原本閲覧の機会に恵まれ、再考を試みた。本稿の詳細は別稿にて検討予定である。

＊2 岡見正雄「『幻中草打畫』翻刻」（『近世文学作家と作品』中央公論社、1973年）参照。

＊3 栃尾武「髑髏の和漢比較文学序説―髑髏説話の源流と日本文学―」（『和漢比較文学』21、1998年）、小峯和明「ものいう髑髏―魔の転生」（『説話の声』新曜社、2000年）など参照。

＊4 尼僧による法語絵巻の享受という側面も想定されるが、この点については拙稿「尼と物語草子」（『国語と国文学』92-5、2015年）で検討した。

＊5 板倉聖哲「東アジアにおける死屍・白骨表現―「六道絵」と「骷髏幻戯図」」（『死生学』4、東京大学出版会、2008年）参照。

【付記】本稿は国文研フォーラム（2015年2月18日）の発表に基づく。席上、ご教示いただいた方々に御礼申し上げる。
原本の閲覧と図版掲載の御許可を賜った鶴満寺住職長谷川眞哲師、衆星堂の梅村茂樹氏に心より感謝申し上げる。

生き物供養と橋供養 ―随心院蔵『慶長五年多摩六郷橋供養願文』と関連して―

相田　満（国文学研究資料館准教授）

1. 何でも供養する日本人

人間以外の生き物やモノを祀る供養碑が日本各地に残されている。昔から日本人は、神仏・人に限らず、魚鳥草木犬馬などの禽獣植物や、さらには針や茶筅（ちゃせん）などのさまざまな器物を祀り、供養碑を建てて鎮魂の営みにいそしんできた。所によっては、いろいろな供養碑が集積して「聖地」のような趣のある所もある程である。

海外の人にとって、このことは相当な驚きのようだが、白アリや金屑（試験用金属片）や日食までが供養される碑があることを知ると、日本人の私でさえびっくりする。

そもそも供養は仏教にちなみ、一般的な辞書には、梵語プージャー pūjā の訳語に由来して、犠牲・供犠（ヤジュニャ yaja）をともなう儀礼体系を持つ宗教や習俗に対峙する、不殺生（ふせっしょう）が強調される儀礼として発展したものである。

もともと仏法僧の三宝に供えられたものであったが、後には仏教徒以外の一般人や、とりわけ日本では生き物やモノの供養へと対象や檀那（催行者）が変容・拡大していった。

もっとも、仏教渡来以前にも動物の死を悼み祀った痕跡はあった。有史以前では、縄文遺跡からは埋葬された犬が少なからず見つかっていることが知られている。文献上の初見では、8世紀初成立の『播磨国風土記』託賀郡（たかのこおり）に、猪と戦って落命した狩犬麻奈志漏（マナシロ）を応神天皇が悼んで墓を作った例があり、犬は今も犬次（いぬつぎ）神社に祀られている。

平安時代は、猫に官位を与えるだけでなく、乳母までつけた愛玩ぶりの貴族達の話が伝わるだけあって（『小右記』長保9.9.19［1007.11.1］、『枕草子』上にさぶらふ御猫は）、供養に関わる話でも、犬の法事に請ぜられた清範律師の話や（『大鏡』道長伝）、左大臣藤原頼長が少年時に愛猫を衣にくるんで棺に納めて葬ったことがあったことを日記に残した（『台記』康治元8.6[1142.8.28]）と、漢学の素養にあふれた頼長ではあったが、儒者的振る舞からほど遠い愛玩ぶりである。

犬には霊験譚的な伝説が多く、そうした奇跡も含めて語り伝えられ、供養される事例に事欠かない。珍しいものでは、江戸時代にお伊勢参りや金比羅詣での代参を行った「伊勢詣り犬」や「金比羅詣り犬」の話が伝わっており、いずれも今も供養が営まれる。あるいは、道案内をつとめた「九度山犬」の伝説そのままに、実際に近年まで高野山参詣で案内をつとめたありし日の案内犬ゴンの姿はビデオに残っており、その像も九度山の弘法大師像の隣に建てられてともに供養されている。

2. 文芸との関わり―金子みすゞの場合

日本における生き物供養の特徴として、摂食や消費などで人の犠牲となった生き物までも供養することが挙げられるが、次に文学に関わる事例を紹介してみよう。

こうした事例で最も代表的といえそうなのが、金子みすゞ（1903-30）の詩であろう。今や世界13ヵ国語に訳され、東日本大震災時に流れた日本公共広告機構のCMでさらに有名になった彼女の詩（童謡）が小学校の教科書に採用されるきっかけになったのが、「濱は祭りのやうだけど／海のなかでは何萬の／鰮（いわし）のとむらいするだろう」の句で知られる『大漁』である。

彼女が生まれ育った山口県北部に位置する長門市仙崎近くの通（かよい）の向岸寺では、今でも4月下旬～5月上旬の1日に鯨回向が営まれるが、その原風景が「沖で鯨の子がひとおと／その鳴る鐘をききながら／死んだ父さま母さまを／こひしこひしと泣いてます」の『鯨法会』や『大漁』を生むことになったのである（なお、浄土真宗では法会を「回向」と呼んでいた。引用の詩はいずれも一部のみを掲出している）。

仙崎湾を中心とする北浦地区は、かつては日本海回遊の鯨を対象とする長州捕鯨で栄えた。鯨は一頭が上がるだけで町に学校が建ち、町民が潤うほどの富をもたらした。そのため、供養碑は全国に散在しているが、とうに捕鯨を終えた仙崎で今も営まれる鯨法会は、1675年（延宝5）向岸寺5世の讃世上人により始められた。

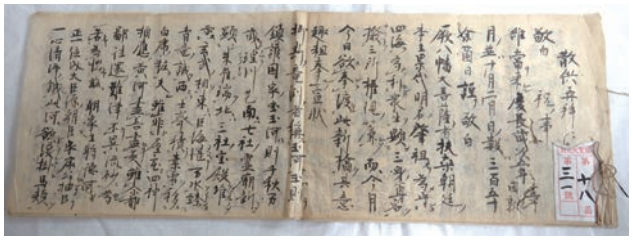
隠居所の清月庵前には鯨の胎内にいた子鯨を収めた鯨墓には、「南無阿弥陀仏」の名号とともに、漁労・狩猟者間で唱えられた諏訪神文の「業尽有情雖放不生／故宿人天同證佛果」（業尽くる有情は放つと雖も生きず／故に人天に宿りて同じく仏果を証せん）の文字（偈（げ））が刻まれる。これは人体に摂取された肉と共に浄土往生を願うもので、この鯨墓のほかに、庵内には鯨の位牌が収められ、向岸寺では今も歴代の鯨の戒名が記された「鯨鯢（げいげい）過去帳」（鯢はめすの鯨）を供えては開かれる法会が営まれているのである。

3. 文芸との関わり―俳諧および橋と馬の供養―

芭蕉復興にともなって上梓された俳書には、芭蕉の句から書名が採られたものが多い。しかも、『蝉塚』（1751・壷中）・『蛸壺塚』（1768・山季坊）・『茶碗塚』（1786・支百）など、生き物供養やモノ供養を想起させるものが少なくないのである。これらは、義仲寺の本墓に葬られた遺骸以外の遺髪や短冊などのゆかりの品を納める詣り墓としての塚と同趣の命名となっている。すなわち、近世期の日本社会においては、人な

らぬ生き物やモノのような名が付けられていても自然に受け止める土壌があったがゆえの現象であったのである[*1]。

この他にもモノの供養と生き物供養とに関連性が見られるものがある。たとえば、橋供養と馬供養の関係があげられるが、これは京都の小野にある真言宗善通寺派大本山随心院藏「多摩六郷橋供養願文」(18函31号『慶長五年修法記』所収)を解読して気づいたもので、他にも類例があることがわかってきた。



随心院藏「多摩六郷橋供養願文」

多摩六郷橋願文は、慶長5年6月23日という関ヶ原合戦の1ヶ月前の紀年をもつ。この時に竣工した橋の規模を願文は「日域無双ノ雁歯(がんし)(橋の上の横板のこと)百餘間ニシテ、古今希有ノ橋ナリ」と表しており、後に両国・千住橋と並ぶ東武三大橋に数えられたこともうなずけよう[*2]。

なお、これまでこの架橋の事を証する唯一の史料が『新編武蔵風土記稿』収載の慶長五年六月二十三日銘徳川家康願文のみで実物が今日伝存せず、『東京市史稿』橋梁編では諸資料を列挙して架橋の事実を証明しようとしたが、どうしても説得力を欠いていたのであった(『太田区史』、1992)。しかし、随心院の願文草稿の発見により、架橋の事実が立証されたのである。

生き物供養に関して言えば、願文中の「幼長均シク牛馬と倶ニ歓喜々々」とか「馬ヲ花山ノ陽(みなみ)ニ帰シ牛ヲ桃林ノ野ニ放チ」等の句が目を引く。架橋、修路は運搬の牛馬にとっても負担の軽減となり、功徳となると考えられていたがゆえの表現である。

他にも現存最古の石碑のひとつ646年(大化2)、僧道登の架橋を記す宇治橋断碑佚文(『帝王編年記』9孝徳記所収)には、宇治川は流れが速く、混雑を避けてつい深みはまってしまい、人馬ともに命を失うことがたびたびなので(修々征人停騎成市　欲赴重深　人馬亡命)、橋を造り人畜を安全に渡河せしめた(搆立此橋　済度人畜)ことを説く表現がある。宇治川渡には『西行物語』の俵屋宗達画に、目隠しされた馬が人と同船する場面が描かれているように、牛馬には難儀な所であった。

とかく物語類で異界の象徴として扱われることの多い橋の場面だが、実際残された供養碑や願文などからは、伝説上のおどろおどろしさとは異なる、慈愛にあふれた姿がうかがえる。そうした事情を反映してか、橋供養碑と馬供養碑(あるいは馬頭観音に表象された物)は、全国に多く残される。中には、牛橋馬を一度に供養する供養碑もあるのは、こうした状況を端的に示しているのである。

「牛橋馬供養塔」
西多摩郡奥多摩町　原 奥多摩水と緑のふれあい館藏

造橋・修路の作善功徳は、中国でも放生と併せて天門へ到る方便として推奨されていた。たとえば、台湾歴史博物館[*3](台北)藏『十殿閻王』[清末]第六殿卞城王(73-00098)には「〔天門〕造橋修路死後転　世子孫代代興旺　多福長寿」「有放生日　後科甲連綿」などが書かれた絵がある。中国に由来するモノ供養にはほかに、筆供養や文字供養などがあるが、日本で文字供養は根付かず、筆供養は毛に使われた動物の慰霊の意味が加わって供養が営まれていることと考えあわせると、多様で広範な展開を見せる日本人の供養観には、独特の個性が強く反映していると思わざるを得ない。

---

*1　相田満「生き物供養から見る自然観の諸相」『アジアの人びとの自然観をたどる』,pp33-6. 勉誠出版 ,2013.11
安保博史「芭蕉塚婢から見る日本人の供養意識」『人間文化研究機構 連携研究「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」最終年度成果報告書』,pp318-323,2015.3

*2　『江戸鹿子』五、『書言故事節用集』十数量など。

*3　台湾国立歴史博物館
http://www.nmh.gov.tw/zh/index.htm (中文 URL)

[謝辞] 本稿は2010-2014年度人間文化研究機構「生き物供養から見る自然観の変遷」(代表・相田)および JSPS 科研費23240032の助成を受けたものです。

多摩地域の資料保存利用機関との連携に向けて

太田　尚宏（国文学研究資料館准教授）

国文学研究資料館（以下、国文研）では、平成25年度より基幹研究として「民間アーカイブズの保存活用システム構築に関する基礎研究」（研究代表者：大友一雄）というプロジェクトを進めている。民間アーカイブズとは、国・地方自治体などの公的団体が作成・管理する公文書ではなく、家や個人・民間団体が作成・授受・蓄積してきた記録群をいう。これらの民間アーカイブズは、過疎化・所蔵者の代替わりといった地域社会の変容や、相次ぐ地震･津波･洪水などの災害で散逸・消滅する事態が加速している。この基幹研究は、これら民間伝来の重要な記録群・書籍類をいかに保存活用していくかという点について理論的観点から検証するとともに、実践モデルとなる民間アーカイブズの調査を通じて、保存活用のためのシステム構築へ向けた基礎的な分析成果の蓄積を目的としている。

民間アーカイブズを保存していくためには、所蔵者と所属自治体との協力関係が欠かせない。日本の自治体では、民間アーカイブズにアクセスする窓口機関として、文化財担当部局や博物館・資料館・文書館などの資料保存利用機関が現場の第一線に立っている。ところが、平成23年3月11日に発生した東日本大震災は、未曽有の広域災害となったことから、ひとつの自治体だけでは資料の散逸・消滅への動きに十分に対応できないことを顕在化させた。そこで、国や都道府県・市区町村、さらには民間団体などをつなぐ地域文化遺産の救済ネットワークの構築が提起され、現在、その取り組みが強化されつつある。

国文研では、こうした試みの一環として、多摩地域をモデルに、ネットワークづくりの実践的研究に着手した。協力をお願いしたのは、東京都三多摩公立博物館協議会（以下、三博協）である。三博協では、震災から時間が経過して人々の危機意識が薄れていくことを懸念し、改めて博物館・資料館などにおける防災をテーマとしたシンポジウムを企画していた。三博協からの打診もあり、国文研の基幹研究および人間文化研究機構の震災に関わる2つの連携研究グループがこの企画に協力し、シンポジウムのテーマを「多摩地域の博物館・資料館・美術館における防災と地域連携」として、三博協と共同で議論づくりなどの準備を進めた。

この中で特筆すべきは、シンポジウム開催に先立って多摩地域の関係機関162館に資料の保全・防災体制に関するアンケート調査を実施したことである。このうち102館から回答が寄せられ（取り扱い資料分野は表１を参照。複数回答）、多摩地域の博物館・資料館などが抱える防災上の問題点が浮かび上がった。アンケート集計の詳細については、三博協の会報『ミュージアム多摩』第36号[1]で公開されているので、ここでは民間アーカイブズに関わる項目に焦点を当てて、そのいくつかを紹介したい。

【表1】取り扱い資料分野

回　答	館数
考古	33
歴史	54
民俗	49
行政資料	12
美術	34
自然史	23
理工系	2
写真	41
映像音声	24
建造物	23
動植物	10
その他	12

表２は、博物館・資料館などが、館外に所在する資料を日常的に把握しているかどうかを尋ねた結果である

これを見ると、民間アーカイブズを含めた地域の資料を網羅的に把握できているのは約2割で、博物館の展示や調査で関係したところのみを把握しているとする回答を加えても約4割程度、ほとんど把握していないとする回答が3分の1を占めていることがわかる。

【表2】館外資料の把握状況

回　答	割合（%）
網羅的に把握できている（所在リストがある）	18
展示や調査で関係したところのみ把握	23
一部の資料に限り情報を把握	26
ほとんど把握していない	33

地震などの災害が発生した際、館内資料のみならず、館外に所在する被災状況を確認する計画があるかどうかについても質問項目を設けたが、「ある」「一部ある」という回答は16%にとどまり、「全くない」との回答は81%であった（表3）。この数値を反映するかのように、東日本大震災のときに文化財の被災状況調査を実施したかという設問に対しても、「登録文化財のみ実施」が40%、「民間所在資料についても実施」が3%、「おこなわなかった」という回答が38%となった（表4）。

【表3】災害時の館外資料の状況確認計画

回　答	割合（%）
ある	3
一部ある	13
他の部署にある	0
全くない	81
その他	3

以上の結果は、多摩地域の博物館・資料館などにおいて、災害時の資料救済対象が館内および把握・登録済みの一部

【表4】震災後の文化財の被災状況調査

回　答	割合（%）
登録文化財のみ実施	40
民間所在資料についても実施	3
おこなわなかった	38
その他	19

の文化財に限られ、地域内に所在する多くの民間資料にまでは及び難いという実情を示している。

もとより災害発生時には、自館の所蔵資料の保全が精一杯で、民間資料には手が回らないというのが正直な姿であろう。このときに有効なのが、被害の少なかった博物館や諸団体からの支援体制であり、そのためには日常的なネットワークを構築しておくことが不可欠である。

平成26年10月30日、国文研の大会議室において開催したシンポジウムでは、①多摩地域で発生が予想される災害のリスク、②民間アーカイブズの保全・救済活動の実際、③住民とともに行う民間資料の保全活動、④東海地震に備えた静岡県での防災ネットワークづくり、という4つの視角から講演をお願いし、活発な討論が行われた[2)]。

日常的なネットワーク体制を構築するためには、このシンポジウムを起点とした継続的な活動が必要である。そこで、国文研の3研究グループと三博協では、ワークショップの開催など、より実践的な活動を加えて連携を深めていくことを確認した。

平成27年2月25日、国文学研究資料館の大会議室において、三博協との2回目の共同の取り組みとなるワークショップ「地域博物館のための紙資料レスキュー技術―身近な道具・資材を用いて―」が開催された。

当日は、当館の青木睦准教授による講演「被災資料の救助・復旧技術の実際」に続いて、①濡れた紙に触れてみよう、②吸水紙乾燥法―キッチンペーパーを使用した乾燥促進処理、③圧縮袋（座布団用）封入法―防カビと吸水措置、④脱塩・洗浄技術、⑤カゴ台車・プラコン・扇風機での乾燥促進、⑥クリーニング―小タワシ・スポンジ・マイクロクロス・刷毛・消しゴム等、⑦被災文書のpHの測定、⑧燃えた資料の観察、という8つのブースを設け、解説・実演が行われた（写真参照）。

これらの紙資料レスキュー技法は、薬局や100円均一ショップ、通信販売などで売られている安価な素材を用い、「誰でも手軽に入手でき、素早く実践に活かす」というコンセプトのもと、国文研の数々の現場経験を踏まえて開発されたノウハウである。このときの参加者は70名近くに達したが、いずれも熱心にメモをとったり、現物に手を触れながら具体的な使用方法について質問したりして、活発な意見交換を行っていた。

多摩地域には博物館団体以外にも、図書館を母体とする研究団体などが数多く存在する。こうした団体との交流・協力関係の構築も、今後の課題となる。より細やかなネットワークづくりを通じて、多摩地域全体の資料を保全していく基盤を整備していきたいと考えている。

1）橋場万里子「シンポジウム『多摩地域の博物館・資料館・美術館における防災と地域連携』の開催と、アンケート結果について」（『ミュージアム多摩』第36号、2015年3月）。

2）詳細については、拙稿「シンポジウム『多摩地域の博物館・資料館・美術館における防災と地域連携』によせて」（『国文研ニューズ』第38号、2015年1月）をご参照いただきたい。

カビが発生した紙資料に対する洗浄

身近な道具を用いた水損資料の乾燥方法

度重なる災害を乗り越えて
ー被災地釜石市の市庁舎燃焼文書のレスキューー

東日本大震災から4年を過ぎた2015年6月4日、復興の嵩上げ工事の槌音響く釜石市の被災地で、私たちは図らずも放火による燃焼被災文書のレスキューをすることとなりました。

6月2日午前4時28分ごろ、釜石市天神町の釜石市役所第4庁舎から出火し、6時40分に鎮火後、市職員が室内から焼け焦げた書類を外に運び出しました。鉄筋コンクリート3階建の1階部分の都市計画課の一部が焼失し、焼失面積は80㎡で、書類やパソコン、机などが焼けました。

都市計画課は、震災後の復興関連業務や災害公営住宅・市営住宅の管理、災害危険区域の指定に関する書類などを担当しており、この火災で大量の書類が焼失しました。3日以降に片付けをし、同庁舎3階での業務再開を目指しました。この火事で復興事業にかかわる書類などが損傷したため、市の要請を受けて震災支援の継続として4日午後から燃焼文書の救助・復旧活動を開始しました（6月4～7日、12～15日の8日間）。

本活動は、人間文化研究機構第二期連携研究「大規模災害と人間文化研究－東日本大震災における被災紙資料の保存と活用に関するソリューション研究」（2012-2014年）を展開した「人命環境アーカイブズ研究のための基礎的調査研究（保存科学班）」の研究によります。

火元にガソリン缶

釜石市役所火災　普段は倉庫に保管

2日未明に釜石市天神町の釜石市役所第4庁舎で発生した火災で、火災発生直後に釜石署員が現場に到着した際、庁舎西側1階都市計画課の窓ガラスが割れていたことが捜査関係者への取材で4日分かった。また市関係者によると、東側から行っており、ガラスは数枚。放水は消火に伴う破損ではない可能性もある。焼け跡には床一面に書類の束が散乱していたが、捜査関係者によると備品などが盗まれた形跡は見つかっていない。

市関係者によると、行方は庁舎四個の鍵付きのプレハブ倉庫に保管しており、刈り払い機用のガソリンが入っていた。

市は毎週金曜日に倉庫の施錠と庫内の物品確認を行っており、5月29日には異常なかった。鍵は庁舎3階の建設課で管理していた。

青木睦教授（アーカイブズ保存科学）によると、作業には約1カ月かかる見通し。

焼け跡には火元とみられる場所が複数あり、同署は油がまかれていないか調べている。

焼けた書類について、同市は国文学研究資料館（東京都立川市）の准教授らの協力を得て、復元作業に入った。同資料館は東日本大震災で損傷した市の資料の復元にも協力している。

岩手日報
2015（平成27）年6月5日付朝刊

東日本大震災の際に津波で海水や泥をかぶり、乾燥・クリーニングを施した文書が現用として使用され、焼け焦げ消火水を浴びたものもありました。これらの文書は4年前の津波で被災し、また今回の火事で被災してしまったものであり、度重なる災害を乗り越え、地域の再建に必要不可欠な文書として活用されなければならない文書です。震災支援の継続・延長線としてしっかりと対応しました。

総量は、チューブファイル、フラットファイルや印刷物など約2,000冊でした。火災の影響のない文書は、移動して使用されており、燃焼文書は、簿冊の炎にあたった箇所だけが真っ黒焦げですが、内部は焼けておらず、ただ放水による水濡れの状態でした。まず、職員の方から優先して救助すべき文書をお聞きし、文書を①優先措置②重度燃焼・水損③図面類④中度燃焼・水損⑤軽度燃焼・水損とにトリアージしました。レスキューにあたっては、被災被害を最小限に抑え、かつ劣化・損傷を拡大進行させないことを第一と心得て実行していきます。6月という気候から、カビを発生させないことが必須です。カビは、今後文書として活用する人体への影響もあり、文書も脆弱にして汚損することとなります。これまでの大津波被災文書の救助･復旧に使用してきた扇風機やキッチンペーパーなどを搬送稼働して効率的に乾燥措置を行い（写真）、6月15日に担当課に引継ぎました。

住民生活記録は行政文書のなかでも最も重要な記録であると同時に、地域社会の記憶を後世に伝える歴史資料でもあり、これらの滅失は地域再生にとって大きな障害となります。二重の災害での苦い経験を踏まえ、今後の研究の課題として、市町村自治体で保存されている記録に焦点をあて、大規模災害を想定した管理システム（日常的な保全管理・被災した場合の修復処置など）のモデル構築に向けた提言が求められると痛感しました。

燃焼文書の乾燥状況　6月14日

＊被災文書の救助・復旧方法については、青木睦「東日本大震災における被災文書の救助･復旧活動」（『国文学研究所紀要』アーカイブズ研究編　第9号、2013年3月、当館HPの学術情報リポジトリに掲載）、『被災資料救助から考える資料保存―東日本大震災後の釜石市での文書レスキューを中心に―』（けやき出版、2013年11月）を参照ください。

（青木　睦）

連続講座　「くずし字で読む『百人一首』」

毎年ご好評をいただいている当館の連続講座「くずし字で読む『源氏物語』」は、今年度より装いを新たに、連続講座「くずし字で読む『百人一首』」として再スタート致します。講師も、昨年度までの当館館長今西の単独講師から、毎回担当の変わる形になりました。さらに、１０月に集中して行っていた形式も改め、毎月第四木曜日の開催（５月スタート、１月、３月は事情により開催致しません）に変更になりました。

百人一首は、国民に最も知られた古典です。その皆さんよくご存じの百人一首を、くずし字で読み解きながら、毎月専門の異なる担当講師による趣向を凝らした講義を楽しんでいただきたいと思っています。テキストは、『錦百人一首あづま織り』を使用します。この本は、江戸時代の浮世絵師勝川春章（かつかわ・しゅんしょう）が描く歌人たちの絵も美しい逸品です。色鮮やかな絵で目を楽しませながら、古代からの名だたる歌人たちの名歌の世界をご堪能いただければと思っています。　（田中　大士）

担当講師

1	5月２８日	田中	大士	6	１０月２２日	齋藤	真麻理
2	6月２５日	山下	則子	7	１１月２６日	神作	研一
3	7月２３日	海野	圭介	8	１２月２４日	恋田	知子
4	8月２７日	小山	順子	9	２月２５日	今西	祐一郎
5	9月２４日	寺島	恒世				

テキストで使用する『錦百人一首あつま織り』

特別展示「韓国古版画博物館名品展」

韓国古版画博物館（韓禅学 館長）は韓国江原道原州（ウォンジュ）市にあります。原州の街の中心街から、車で小一時間ほど入った山間にある、大変景色の良い場所です。明珠寺（ミョンジュサ）というお寺に併設されたものですが、韓国は朝鮮王朝が儒教を旨としていましたので、仏教を排斥し、お寺は山の奥に追いやられてしまったのです。

小さな博物館ですが、所蔵品は大変充実しています。韓国の古い版画はもちろんのこと、中国、日本、モンゴル、チベットなどアジアの広い範囲の版画を集めているのです。版画だけではありません。版画に関係するもの、例えば、版木、版木を彫る彫刻刀、刷るためのバレンなどの道具類も各地のものを収集しています。特に版木は多く、日本の江戸時代のもの、さらには版本の表紙の模様を刷るための版木などもあり、貴重です。

私は２０１２年から毎年訪れています。年１回開催される《原州古版画文化祭》と、同時開催される《韓・中・日古版画学術大会》に参加するためです。《学術大会》で研究発表をするとともに、そこに集まった日中韓の研究者と交流を深めてきました。また、《文化祭》では、各国の職人さんたちによる、版木の彫りや刷り、バレン制作の実演などがあり、大変興味深いものです。その中で、一度日本でもやってみようということになりました。本年は日韓国交正常化５０周年にあたる節目の年でもあります。また、私が代表を勤めている科学研究費補助金による研究「東アジア（日・中・韓）絵入り刊本成立と展開に関する総合研究」の最終年度でもありましたので、成果発表のワークショップとともに古版画博物館の名品を展示することとなりました。

韓国の古版画だけの展示会は、日本では初めてではないでしょうか。普段目にすることのない貴重なものを展示する予定です。この機会に、是非ご覧ください。

ワークショップでは、韓国、ベトナム他の研究者による研究発表を行います。それと同時に、各国の職人による版画の実演を企画中です。詳細は決まり次第、チラシやポスターでお知らせいたします。こちらにも是非ご参加ください。

（入口　敦志）

特別展示：韓国古版画博物館名品展
展示会場：国文学研究資料館１階展示室
展示会期：平成２７年１０月１３日（火）～１１月２０日（金）
※休室日：土曜、日曜、祝日
開室時間：午前１０時～午後４時３０分
※入室は午後４時まで

ワークショップ：東アジアの絵入り刊本（仮）
会　　場：国文学研究資料館
日　　時：平成２７年１０月１７日（土）
※展示室特別開室

古版画博物館・外観

古版画博物館・展示室

平成 27 年度国文学研究資料館「古典の日」講演会

「古典の日」は古典が我が国の文化において重要な位置を占め、優れた価値を有していることに鑑み、国民が広く古典に親しむことを目的として、平成 24 年 3 月に法制化されました。11 月 1 日は、我が国の代表的な古典作品である『源氏物語』の成立に関して、最も古い日時が寛弘五年（1008）11 月 1 日であることから、この日に定められました。日本古典文学の文献資料収集と研究を主事業とする国文学研究資料館も、「古典の日」の趣旨に賛同し、平成 24 年度から記念の講演会を催しております。

「古典の日」講演会 4 年目の本年は、日本文学研究者・東京大学大学院教授 ロバート キャンベル先生をお招きして開催します。当館からは、齋藤 真麻理氏が講演します。

古典に親しむ絶好の機会として、ふるってご参加いただきますよう、お待ち申し上げております。

日　　時： 平成27年11月1日（日）13時30分～16時00分（開場：12時30分）

会　　場： ベルサール神田（東京都千代田区神田美土代町7住友不動産神田ビル2階）
「小川町駅」B6出口徒歩2分（新宿線）
「新御茶ノ水駅」B6出口徒歩2分（千代田線）
「淡路町駅」A6出口徒歩3分（丸ノ内線）
「神田駅」北口徒歩7分（JR線）
「神田駅」4番出口徒歩7分（銀座線）
「大手町駅」C1出口徒歩8分（半蔵門線,丸ノ内線,東西線,三田線,千代田線）

講演内容及び講師：

1　「春琴の恋－御伽草子の世界から－」 齋藤 真麻理（国文学研究資料館教授）

2　「日本文学のアーリー・モダン」 ロバート キャンベル（日本文学研究者・東京大学大学院教授）

聴 講 料： 無　料　※事前申込が必要です

申込方法： 事前申込　定員450名（応募多数の場合は抽選）
ハガキまたはE-mailに**①郵便番号、②住所、③電話番号、④氏名（フリガナ）**をご記入のうえ、期日までお申し込みください。なお、お申し込みは、お一人様 1 回限りとさせていただきます。また、同時に複数名でのお申し込みは受け付けつけられませんので、ご了承ください。

【ハガキの場合】 宛先：〒190-0014 東京都立川市緑町10-3
宛名：国文学研究資料館「古典の日」講演会係
※官製ハガキにてお送りください。

【E-mail の場合】 宛先：kikakukoho@nijl.ac.jp
件名：平成27 年度「古典の日」講演会（氏名）

申込締切日：平成27年9月14日（月）必着

※当選者の発表は、**10月中旬までの受講票の発送**をもってかえさせていただきます。

※この申し込みを通じて得た個人情報は、連絡業務のみに使用させていただきます。

※自然災害により交通機関等への影響が予想される場合は、講演会を中止することがあります。

お問い合わせ先：
〒190-0014　東京都立川市緑町10-3
TEL：050-5533-2910
E-mail：kikakukoho@nijl.ac.jp

講師：ロバート キャンベル氏

第 39 回国際日本文学研究集会
The 39th International Conference on Japanese Literature

当館では、日本文学研究者による研究発表・討議により、広い視野からの日本文学研究の進展を図り、研究者相互の国際交流を深めるため、国際日本文学研究集会を開催しています。

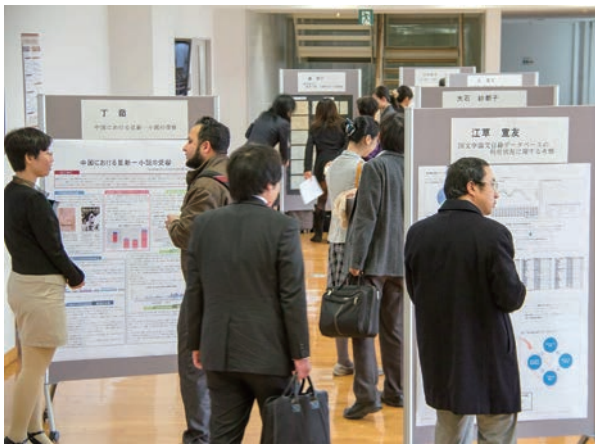
平成27年度は、以下のとおり開催します。

日　　程：平成27年（2015年）11月14日（土）～11月15日（日）
主　　催：大学共同利用機関法人人間文化研究機構　国文学研究資料館
会　　場：国文学研究資料館
内　　容：①研究発表
②ショートセッション発表
③ポスターセッション発表
④シンポジウム（テーマ「越境する日本文学」（仮題））
※研究発表者及び研究発表表題については、9月下旬頃までに決定し、プログラムを当館ホームページにて公開する予定です。

使用言語：日本語
参加要領：参加費／無料
参加資格／日本文学に関心のある者（研究者・大学院生・学生・留学生など）
申込み方法／参加の受付は当日会場で行います。

お問い合わせ先：
国文学研究資料館　国際日本文学研究集会事務局
〒190-0014　東京都立川市緑町10-3
TEL：050-5533-2911　FAX：042-526-8604
E-mail：icjl@nijl.ac.jp

平成２６年度研究発表


平成２６年度ポスターセッション

『幕藩政アーカイブズの総合的研究』の刊行

２１世紀は、「情報」が社会を規定する世紀であることが繰り返されます。実際、これとどう向き合うかが、個人・組織にとって大きな課題となりつつあります。

情報の形態はさまざまですが、我々が扱う人文科学に関わる情報源は、最初からその価値が確定しているわけではありません。他の分野でも共通であるかもしれませんが、現在の情報化社会は、２０世紀までのアナログの情報資源の蓄積に依拠して成り立っている面も少なくありません。とくに基本的な情報においてはそれが顕著でしょう。

ビックデータなどが注目される状況もありますが、社会をトータルに理解するには、様々な情報が必要となります。そのためのひとつとして、社会の基本的情報（文字記録、映像など）をより良くアーカイブズ化し、後世に伝える仕組みを如何に構築するかが、大きな課題といえます。

刊行の『幕藩政アーカイブズの総合的研究』（思文閣出版）は、様々な営みのなかで発生した厖大な江戸時代の文書・記録を、組織や集団が如何に管理コントロールしてきたのか、その追究を目指したものです。その意義は、当時の社会的合理性や「平等性」の質の追求にとどまらず、具体的な管理コントロールの実態解明を通じて、伝存する資料群を資源化する際の基礎研究とすることを狙いとした点にあります。序章において高橋実氏は「個人の文書であれ、団体の文書であれ、組織機構文書であれ、それら文書群を科学的に理解するためには、そこでの文書管理保存システムを把握する必要がある」と強調されています。

本書は第１編「幕政文書の整理と管理」、第２編「藩政文書記録の管理と伝来」、第３編「藩文書記録の管理・編纂担当者」からなり、これらは都合１６本の論文と序章によって編成され、江戸時代の主要な組織の記録管理の実態が報告されています。当館での共同研究や文部科学省科学研究補助金の成果を踏まえたものであり、近代社会はもちろん、現代社会を考える上でも重要な研究といえるでしょう。（2015年2月20日刊）　（大友　一雄）

総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況

○平成２７年度入試説明会

平成27年10月24日（土）13時30分から、平成28年度入学希望者を対象とした入試説明会を開催します。

当日は、今西館長による特別講義も開催いたします（15時～16時30分の予定。入学希望者以外の方もご参加いただけます。）。

詳細は、当館 Web サイトの「総研大日本文学専攻」ページにてご確認ください。

http://www.nijl.ac.jp/~kyodo/soken.files/enter/seminar.html

多数のご参加をお待ちしております。

＜開催概要＞

日　　時：平成27（2015）年10月24日（土）13：30～17：00（15：00～16：30は特別講義）
会　　場：国文学研究資料館（東京都立川市緑町10－3）
内　　容：専攻や入試についての説明、施設見学、希望教員との面談など

特別講義：「骸骨の東西－『一休骸骨』と『死の舞踊』－」
講　　師：今西祐一郎（国文学研究資料館館長、日本文学研究専攻教授）

○平成２７年度入学式及び第１回未来科学者賞授賞式

平成27年4月6日（月）に、平成27年度入学式が執り行われ、当専攻の新入生である森下涼子さんが出席しました。

また、同日は第１回未来科学者賞授賞式も開催され、受賞者の１人である当専攻の黄昱さんに、岡田学長から賞状が授与されました。

左から　山下専攻長、黄氏、森下氏、相田准教授

○総研大未来科学者賞（第１回）受賞

黄（こう）　昱（いく）（総合研究大学院大学 文化科学研究科 日本文学研究専攻　博士後期課程）

博士論文のテーマでもある「『徒然草』の漢籍受容と漢訳－文学におけるオリジナリティの創出について－」という私の研究は第1回総研大未来科学者賞を受賞することとなり、平成27年4月6日の入学式時に授賞式が行われました。この賞は従来、学長賞と呼ばれていたもので、科学者を志す在学生の研究の奨励を目的として平成26年度に新設されたものです。

私の研究は、日本の古典文学の中でも美文と賞賛される『徒然草』と漢籍の享受や影響、漢訳された『徒然草』などを取り上げて、受容と影響というふたつの視点からこの作品を考えるものです。『徒然草』は和文脈で書かれたものですが、その中に、『文選』、『白氏文集』や老荘の書名が挙げられ、文章表現に引用されるだけでなく、思想・感情などの方面に漢籍の影響が多く見られることは、周知の通りです。

作者の兼好法師が「ひとり、灯のもとに」親しんだ書籍の中、つまり、彼の教養の基盤に、漢籍が重要な位置を占めていることは、『徒然草』が広く流布し読まれた近世期の古注釈書に早くも指摘されています。近代以降になっても漢籍の出典分析は続けて行われてきましたが、『徒然草』の漢籍受容の方法と意義についての研究はまだ十分であるとはいえませんでした。本研究は漢籍の原典が日本に伝わった後の受容と変容の状況も視野に入れながら、『徒然草』が王朝物語や和歌・説話など先行する日本の古典作品を中間媒体として間接的に漢籍を受容した方法とその表現効果を分析し、漢籍の受容が『徒然草』の文章表現の形成に与えた影響を明確にし、その位置づけを考察しました。

また、『徒然草』のこのような漢籍的要素が背景にあるかもしれませんが、近世期に日本人の手によって『徒然草』を漢文に訳した作品が現れました。この研究では、その典型例として当時の知識人の漢文基礎教養になる異種『蒙求』作品群を扱い、『徒然草』の説話を取り入れた十一種の異種『蒙求』を調査し、その漢訳の特徴と編纂意図などを分析することによって、近世期以降『徒然草』受容のもうひとつの形である漢訳という問題を考察しました。

このように、『徒然草』における漢籍・漢文との関わりについて、漢籍を受容する方法と、それが後世の漢文作品に影響を与えたことという両面から捉えることによって、古典作品が中国から日本へ伝来した後の、中世から近世への伝承の姿やありようが見えてきます。『徒然草』という作品の古典としてのあり方を、中国と日本、中世と近世という空間と時間のふたつの軸において考える方法は、『徒然草』研究の新しい切り口に繋がるものと思います。

授賞式の様子

資料の取り扱い方をはじめ多くのことをお教え下さった相田先生、ご指導下さった日本文学研究専攻の先生方に、深く感謝申し上げます。未熟な点がたくさんある私の研究を表彰という形で評価していただいたことを励みに、今後もより一層精進して参りたいと思います。

閲覧室カレンダー　2015年8月～2015年10月

■青は休館日　■黄色は土曜開館日

8月

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

9月

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30			

10月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

●開館 :9:30～18:00　●請求受付 :9:30～12:00,13:00～17:00　●複写受付 :9:30～16:00

ただし、土曜開館日は、

●開館 :9:30～17:00　●請求受付 :9:30～12:00,13:00～16:00　●複写受付 :9:30～15:00

表紙絵資料紹介

二曲三体人形図（当館蔵　川瀬一馬旧蔵書）

袋綴冊子本1冊。28.5×19.9㎝。「応永廿八年七月日　世阿判」の奥書のある世阿弥伝書の写本。

世阿弥は応永27年（1420）6月に著した『至花道』の「二曲三体の事」において、能の芸を修得する際の根本としての二曲と三体を規定した。二曲とは能の演技の基本要素である謡と舞、三体とは能の物まねの基本風体である老体（老人）・女体（女性）・軍体（武士）を言い、そのほかの風体は二曲三体から自然に生まれる応用風であるとする。

『二曲三体人形図』は、この二曲三体説を詳論した伝書で、『至花道』では二曲三体とその応用風の演技のあり方を詳しく述べていないため、絵図を用いて具体的に説いたものである。初めに「二曲之人形」として「童舞」、次いで「三体之人形」として「老体」「老舞」「女体」「女舞」「軍体」、さらに「砕動風」（人間が鬼になったもの）「力動風」（本来の鬼）「天女」の各風体を掲げ、それぞれ絵図の下に説明を付している。能の絵図として最古のものである。

この写本は、戦前には安田善次郎の安田文庫に蔵され、昭和20年3月刊の川瀬一馬『頭註世阿弥二十三部集』の底本に用いられたが、長らく所在が不明であった。実は川瀬氏の手に移っていたもので、平成24年度に当館の所蔵となり、それ以前に当館で購入した川瀬氏旧蔵の古典籍類約450点とともに、特別コレクション「川瀬一馬旧蔵書」の中に含まれている。

筆跡などから、第八世観世大夫元尚（1536？～1577）の書写になり、世阿弥直系の子孫の家である越智観世家伝来本に基づく写本と推定される。室町中期書写の金春禅竹書写本に次ぐ古写本で、本文・絵図とも禅竹本と相補う点がある。たまたま、この写本を江戸中期に転写した観世大夫家の本に基づき、田安宗武が写させた本が当館の特別コレクション「田安徳川家資料」の中にあるので、参考のため両者の「童舞」の図を並べて掲げておく。

（落合　博志）

田安徳川家本

観世元尚書写本

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国文学研究資料館
〒190-0014 東京都立川市緑町 10-3
Tel:050-5533-2910 Fax:042-526-8604

発行日　平成27年（2015）7月31日
編　集　国文学研究資料館広報出版室
印刷所　株式会社 アズディップ
ⓒ人間文化研究機構国文学研究資料館

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。